第１学年Ｃ組　国語科授業案

公開Ⅰ　　１Ｃ教室
授業者　　志賀　正章

１　単　元　言葉は今（文化を見つめる）

２　単元の構想

（１）本単元で目ざす子どもの姿

「学校では教えてくれない日本語の授業」を読み、方言の衰退が日本語の危機であるという考えに出会った子どもは、本当に日本語が危機なのかを確認するため、方言の現状を調べ始める。自分たちの方言使用の減少や、方言がインパクトのために使用されていることなど、方言の変化や存在意義を見いだした子どもは、言葉を大切に扱っていこうとする

（２）本単元で伸ばしたい力

前単元「イルカを語る新聞」では、社説を読み解く中で、情報の書かれ方とその読み取り方について考えた。言葉一つ一つのもつ意味を多面的に分析して読む経験をとおして捉える力を高めた。

本単元では、まず、「学校では教えてくれない日本語の授業」（齋藤孝）を読み、方言の衰退が日本語の危機につながるという考えに出会う。その考えの真偽を明らかにするために、自分自身の方言の使用状況を調べ、日本語の危機に対する考えをもつことで捉える力を高めていく。更に、視野を広げ、方言の社会的な使用状況を調べ、それが日本語の危機とどう結びついているのかを話し合うことで、方言に対する考えを構築し、練り上げる力を高める。そして、追究や交流から見いだしたことを根拠に、方言の危機に対する向き合い方をまとめることをとおして表現する力を高める。

（３）はたらきかけと「学んだこと」を行動につなげる子どもの姿

本単元では、導入において、三河弁番付を提示する。子どもは知らない言葉が多いことから自分と方言との関わりの薄さを感じる。加えて「学校では教えてくれない日本語の授業」（齋藤孝）を提示することで、子どもは、方言の衰退が日本語の危機につながるという考えを知る。そして、方言は本当に衰退しているのか、方言の衰退が日本語の危機につながるのかという疑問を抱く。

子どもは、自分自身の方言の知識や使用状況について、仲間や家族に聞き取りをするなどの方法で調べる。しかし、方言の特徴を知らないことには、方言の現状を知ることができないと立ち止まるであろう。そこで、豊橋方言研究会の吉川氏に方言の基礎的な知識や現代に至るまでの変遷について伺う機会を設ける。方言の特徴を知った子どもは、自分たちが方言への理解が浅く、あまり使用していないという現状を見いだす。そして、それが日本語の危機につながるのかどうかを意見交流をとおして考えていく。身のまわりの現状を把握しただけでは不十分であると考えた子どもは、調査が不十分であると考えた子どもは、追究の幅を広げ、社会的な方言の使用状況を調べ始める。

そして、社会的な方言の使用状況を調べていく中で、地元の方言の知識やその使用が衰退している反面、マスメディアなどで方言が広く伝わり、共通語化していることに気づく。また、標語や商品名や日常会話などで、おもしろさやインパクトとしての使用が広がっている状況を見いだす。このような現状について日本語の危機と考えるのかを再度意見交流を行う。その中で、方言の温かみの重要性に対する考えをもつ子どもの追究を示すことによって、地元の言葉で関わり合うことの意義を見いだしていけるようにする。方言の衰退と使用の現状を理解した子どもたちは、自分の地元の方言を見つめ直し、他地域の方言も大切にしながら方言と向き合うようになる。

3　単元構想表（15時間完了）

主なはたらきかけ	思い・考え ／ 「学んだこと」 ／ 子どもの行動	国語科で重視する力
○認識を揺さぶる提示 普段自分たちが方言を使っているこかに興味をもつうとができるよう三河弁番付と、学校では教えてくれない日本語の授業」（齋藤孝）の「日本人のパワーは方言にある」を提示する	テレビでよく方言を使って話していておもしろい 先生の言葉を聞いているとイントネーションの違いを感じる	
	本当に方言を使わなくなっているのだろうか　1時～2時 方言番付を見ても知らない言葉のほうが多い 方言を使わないことが「日本語の危機」になるのだろうか 聞けばわかるけれど、自分からは使わない方言がある **あまり方言を意識していないので、危機に感じることはない。本当に日本語は危機的な状態なのだろうか** 自分の方言の使用について調べる 3時～6時	**☆捉える力** ・方言と自分の生活との関わりを、生活を振り返って考え、方言の現状やその問題点を見いだす
○見通しをもつための提示 方言の使われ方の変化について知り、現代の方言使用の状況へ着目することができるように、豊橋方言研究会の吉川氏の話を聞く機会を設ける	どの言葉が方言なのかがわからない。専門家に話を聞きたい 共通語と地元の方言との区別がわかっていない 友達とお互いに話す言葉を聞き合い、言葉と使用数を調べた 文末の「だら」は言うけれど「なん」は言わなくなっている 自分たちの生活だけでは本当に危機なのか結論づけられない 友達はうけねらいで大阪弁を使うことがある **共通語があたりまえで、方言を使う重要性を感じていないのが危機なのかもしれない。このまま方言が使われなくなってよいのか** 方言を使わなくなっていることが社会的な状況なのかを調べる 7時～11時	**☆捉える力** ・自分の方言の使用状況を調べることをとおして、日本語が危機に面しているのかについて自分の考えをもつ
○認識を揺さぶる提示 方言の温かみの重要性に対する考えを深めることができるようにするために、地元の方言を使って語り合うことの温かみを感じるエピソードを調べた子どもの事例を取り上げる	共通語に思える方言もある。方言が共通語化している 昭和35年生まれぐらいから方言を使わなくなっている おもしろみで使うことが増えており危機ではなくなっている 方言を耳にすることが多くなったが、地元の言葉は少ない 方言を伝えられる80才ぐらいまでの人が少なくなっている テレビの普及により表面的には多種の方言を知っている **自分たちと方言との関わりが表面的であることを、日本語の危機と言っている。方言とどう向き合っていけばよいのだろう** 方言とどう向き合っていくべきかを考える 12時～15時	**☆練り上げる力** ・社会的な方言の現代の使用の様子を捉え、仲間との意見交流をとおして、方言が使用されている面に目を向け、日本語が危機の状態にあることについての考えを構築する
○仲間の考えを示す 方言の使用について視野を広げられるようにするために、異なる地域での生活を視野に入れた考えをもつ子どもを指名する	他地区の方言だけでなくその気質を知ることが大切だ 地元の方言を知って使うことが、生活を温かく豊かにする 他の土地で生活するようになっても、地元の言葉を忘れない **方言は変化しながら、受け継がれていることがわかった。地元の方言も、他地区の方言もそれぞれに大切にしていきたい** 他地区の方言も尊重しながら方言と向き合っていく	**☆表現する力** ・方言の使用の状況を受けて、方言が地元の言葉としての重要性を維持していけるようにするにはどうすればよいのかを考えてまとめる
	地元の方言を身近に感じながら、コミュニケーションを図る 相手に応じた言葉の使い方を考えて使用する	